

舞鶴港に復員。

昭和二十六年国家地方警察巡查を拝命、昭和五十年八月退職、株式会社アイシーアールを設立今日に至

財団法人全国強制抑留者協会愛知県支部発足以来の会員で、長年理事兼書記として支部発展に寄与

更に一昨年来「愛知県シベリア抑留者祈念碑建立之会」の会計として、平成十八年五月末に立派に完成

(愛知県 河村 広康)

## シベリア抑留記

滋賀県 小松 藤次郎

海空共に、敵の制圏域に入った日本列車の最北端占守島の昭和二十(一九四五)年八月は、毎日三、四回、アメリカ空軍の重爆機による高空よりの爆撃と、八月九日突如宣戦布告したソ連軍の戦闘機による機銃掃射にさらされていた。

片岡湾と海軍飛行場がよく見える郡司ヶ丘の我が隊は、三ヶ月前の五月に内地へ転進した第六高射砲隊の残留、僅か九人の照空隊である。

八月十五日昼過ぎ、第五十一警備隊本部から帰隊された助乗中尉から、突然終戦が伝達され、無条件降伏を知り、一挙に奈落の底に突き落とされた思いで、張り詰めていた戦意はもろくも崩れ、ただ茫然とする中、明けて十六日には、近くのカムチャツカから、ソ連軍の地上部隊が、占守北端の国端崎に來襲、彼我は終戦を知りながら戦闘状

態に入り、無益な戦いは四日間続いたのである。

戦いの帰すうは語るべくもなく、八月二十二日、三好野飛行場で武装解除となったが、その日はソ連軍の事情でか、夕刻になって中止が伝えられた。この日は朝から大雨で全身ビショ濡れになった日本軍将兵の姿はひとしお哀れで、見るべくもなかった。この光景は翌日に片岡空軍飛行場で行われた痛恨の武装解除と共に、今なお眼底に焼きついて剥がれない。

それから約二カ月、ソ連軍監視の下で、島内の戦場整理の苦役に従事することになったのだが、祖国はいかにと思いを馳せるとき、味わったことの無い不安にかられ、魂の消えうせた消沈の中で、今後どのような運命が待ち受けているのかと思いを巡らすとき、悔しさに心がうずいた。

十月十四日ついに命令が出た。指定された被服を梱包し、島の南端にあたる長崎港に向かうことになった。

帰してくれるのであろうか、とはかない望を抱

きつつ、その晩は寒さに震えながら露営し、翌十五日、ソ連貨物船に乗船、夕闇迫るころ先行は知らされないまま幌筵海峡をオホーツク海に向け出港した。

夜の航海は方向が分からない。しかし我々日本兵は私物の磁石を持っていたので、幾人かの仲間が船の進行方向に疑問を感じざわめきだした。この不穏な空気を察知したソ連軍指揮官が日本軍の引率指揮者に伝達するよう命じた内容は、この船は直接日本には行かない、二、三カ月シベリアのある所で草刈りをやって日本からの迎えを待つことになる。と言う事であった。

無条件降伏とあつては、いかんとも無し難い苦悩を知らされた。船内の我々は完全な袋の鼠である。

占守島を出てから数時間過ぎて疲れ果てた日本兵に沈黙の時が流れる。これを見張っていたソ連兵がボソボソ動き出し、日本兵が持っている時計、万年筆等の略奪が発生し、一時ざわめいたことも

あつた。

思えばソ連軍は八月九日に日本に対し戦線を布告し、僅か十日足らずの戦鬪で戦勝国の利権を欲しいままに振る舞つたのである。

船は、オホーツク海を一路北進を続け三日目にマガダン州のマガダン港に着いたのであつたが、これから四年間の抑留生活が待つていたとは誰も考えられないことだつた。

十月半ばと言うのに入ってくる風景は白一色で、海面も氷片が浮かんでいて風が冷たい。命ぜられるままに順次下船し、背のうを背負い、湾岸道路をマガダン市へと異様な隊列は進む。一時間ばかり歩いて到着したのはトランジートバラック（仮宿舎）で旅装を解き一夜を明かすことになつた。我々を迎えてくれたのはおびただしい南京虫だつた。入れ代わり仮泊するソ連囚人の血を吸つて生きてゐるらしい。

翌十九日は早くも移動が始まる。カリマ街道（金山開発道路）の八十キロ付近の沿線からマガダン

市までと、我々海軍二カ中隊はポルト收容所へとそれぞれ分散していつたのである。

我々が居住することになつたポルト收容所は、港の近くの丘の上にあつて海岸道路より約三十メートルほど高い台地に建てられている。この收容所へ通じる道は、急勾配の丘の斜面に設けられた木製の階段で片側に手摺が付いており、踏板は雪に埋もれている。昇り降りには手摺にすがつて一步一步進むわけで、永い冬中、時に吹雪の日の苦痛は、終世忘れることのできない体験である。

船内での作業は建設資材を始め食糧、燃料等、およそ人間生活に必要な物資のすべてである。最も苦痛だつた作業はセメントの荷揚げである。一応紙袋入りだが袋の破損した物が多くて、狭くて深い船倉の底で発生する粉塵は、ノーマスクの呼吸器官から体内に、また外部は衣服の隙間から肌にと入り込み、特に眼鼻の故障には正視できないものがあつた。この様に非衛生的な状態は作業の終り次第、可能な限り体の清浄な回復を求めた

いが、収容所にはシャワー等の設備はおろか、氷点下では洗顔さえも可能な設備はなかったのである。抑留者に課せられた強制労働とは言え、人道に上許し難い虐待だと思ふ。

船からの荷揚作業は十一月下旬まで続いたが、湾内の結氷が厚くなり商船の入港が不可能となった、しばらく周辺の雑用に使われたが、十二月初めカリマ街道三十九キロ地点の収容所に移動させられ、付近の山林の伐採をやることになった。ここの生活は八カ月ばかりで七月末にはマガダンの収容所に引上げることになったのだが、四年間の抑留中、最も悲惨なものだった。もう六十年も昔のことでもあり記録等はもちろん一切無し、ただこの体が覚えている記憶をたどって見ることにする。

零下四〇度の寒冷地での幕舎生活の実態を思い出してみよう。電気設備は一切無し、窓も無ければ暖炉は二個（ドラム缶で薪を燃料とする）。室内の照明は、吊下用の石油ランプが二個、床は土間

のまま、舎内の中央部を通路に、コの字型に棚が造ってあって、ここが居住部分で、百二十人ばかり入れられたのだから一人当たり四十センチ幅が各人の休息場である。北緯六〇度の地点では昼間が六時間と極端に短い。朝は暗い中で食事を済まし、明るくなるころ、伐採現場に到着するようラゲルを出発するのである。帰りは午後三時ごろには暗くなってくるので労働時間を確保するには昼休みはなく、雪の中で凍った黒パンをかじるのだった。暗くなった雪道を、とぼとぼと収容所へ向うのであるが約一時間はかかった。帰ってきて暖かい場所は暖炉の回り僅かなスペースのみ、咽を潤す温水も無い、自分の飯盒で雪を解かすのも日課の一つであった。この生活で苦勞したのは手袋や綿入れ、長靴の破れの修繕である。暗いランプの灯りでは針仕事が出来ないので、缶詰の空缶を拾って、綿糸を束ねて芯を造り、ソ連人が運転する車両の燃料（軽油）を交換で手に入れ、即製のランプを作って、手許の灯りとしたのであった。

これも明日の我が身を守るため、欠かすことの出  
来ない日課だったのである。この様な原始時代に  
戻ったような生活を、百人以上が続けるのだから  
幕舎内面に水蒸気が付着して結氷する、日ごとに  
厚みを増して来る(約三センチ)。これにランプの  
油煙が付着する。またお互いの衣服や持ち物も油  
煙で黒ずんで来る。衣服はおろか、体まで煤けて  
くるが、寒いので衣類を脱ぐことが出来ず、結局  
五十日ばかり風呂にも入れず髭も剃ることも出来  
なかった。このような非人間的な生活が続けば、  
心身ともに異状が生ずることは当然で、約半数の  
仲間がマガダンに送還されたようだった。

四月も半ばを過ぎるころになると昼間が長くな  
り日当りの良いところから昼間は氷も溶け出して  
くる。そうなると幕舎内は大変である。天井面の  
氷から壁面へと溶けて、煤も水に融け、薄墨色の  
雪が所かまわず垂れて、居る場所も無い始末とな  
る。

このように自然環境の厳しい中で、苦難の日が

続いたが、七月ごろになって、作業集団としての  
態様を失ったのか、残存者一同マガダンのラーゲ  
ルに引上げることになった。

マガダン収容所では、仲間も多く、作業の種類  
も多面にわたり、生活環境もやや改善されていっ  
たが、反面作業成績の向上を求めている締付けは、  
厳しいものがあつた。

マガダンでは都市建設作業が多かつたが、中  
も土工の基盤である掘土に最も苦しめられた。こ  
の地域では永久凍土と言われるもので、地表から  
三メートルは凍っていて、九月上旬のこの地での  
高温期には、表土が約五十センチ溶けるのみで、  
以下は永久凍土である。そのため、上水道工事は、  
凍土の下層に埋設する必要がある、当時は機械掘  
りは無く、囚人や俘虜に手掘りで掘削をやらせた  
のである。道具としては槍のような鉄棒とスコッ  
プでかい取るように作業を進めたのであるが、手  
袋に水分があり、鉄棒が零下四〇度にも冷えてい  
ると、瞬時接着して作業の障害となるのであつた。

三年目の秋になって、陸海混成で約百人がマガダン市から数キロ離れたオホーツク海に面したベツショラヤに移動させられた。ここでは海の結氷期を狙って、小湾内に防波堤と岸壁を造る仕事である。工事の概略は海岸近くの岩山を爆砕して海に投入する仕事だが機械力はほとんど用いず、職人らしい者は、丸太を組合せ石を投入して沈下させて壁を造成する仕事を担当する人達のみで、他はダンブカーの運転手と日本兵のみで推進してゆくのであった。この工事の監督はセリゲイと言い、この現場に来るまでに既に四、五回、同現場で作業に従事し、互いに顔なじみの中で、大きな岩石を適当な大きさに破砕するハツパは、作業員を安全な場所に退避させ、監督と二人で区域を決め、導火線を装備し逃避の余裕を見て約二十箇所ばかり着火する危険な仕事を十数回はこなした記憶がある。

苦難の思い出は尽きないが、この現場も流水で一応休止となり、またマガダンの収容所へ帰り、

働き易い白夜の夏を過ごし九月末、ダモイが実現することになり、ソ連船でオホーツク海を南下、宗谷海峡を、左に北海道を見ながら、日本海をナホトカへ……。

日本よりの迎えの船を待つて十月三日に、六年前応召した舞鶴に上陸したのであった。

思えば四年間、苦難のシベリア抑留生活であったが、不思議と命を長らえ、今月八十七歳の誕生日を健康で迎えることが出来、感無量。それにしても戦場と、シベリア抑留によって、多くの若き同輩が命を絶つたことは実に断腸の思いで、ご冥福を祈るものである。

### 【執筆者の紹介】

本籍地 滋賀県犬上郡由良町金屋

現住所 同

生年月日 大正八年七月二十五日

学歴 高小卒

軍歴 昭和十四年四月 徴兵検査 第一補

充兵役

昭和十八年十二月 召集令状により

舞鶴海浜団に入団 館山海軍砲術学

校へ

昭和十九年一月 横須賀海兵団を経

て大湊海浜団へ

同 二月 千島列島北端占守島に上

陸 第五一警備隊所属

昭和二十年八月九日 ソ連参戦

同 八月二十日 停戦

同 八月二十五日 ソ連軍による武

装解除

同 十月 東シベリアマガダンに上

陸

昭和二十四年十月三日 舞鶴港に上

陸帰還

(滋賀県 林 憲一)

シベリア抑留は、私の生きる原点

愛媛県 寄岡 秀夫

一 現在の私

私は、本年五月、満七十八歳になりました。

結婚して五十一年、二男一女と六人の孫に恵まれ、夫婦揃って元気で幸せな毎日に感謝しております。

シベリア抑留から帰還し、いろいろな職業を経験した後、生きるために創業した金融業で五十二年。それを天職として会社を設立してから四十七年、会社は、グループを合わせると社員数約千四百人、株式を東証ならびにニューヨーク証券取引所に上場するまでになりました。

我がNISグループ株式会社は、近い将来「我が国中小企業金融分野で、業界ナンバー一の業績と社会的信用を構築して、本物のノンバンクになること」です。我が社は、更に一昨年七月、